

マンシヨン防災——識者に聞く

自宅がマンシヨンの場合、一戸建てとは異なる震災への備えが必要になる。家庭や地域での防災対策の普及に取り組む民間会社「危機管理教育研究所」（横浜市）の



代表で、マンシヨンの地震防災に関する著書もある国崎信江さんに聞いた。

「一戸建てとの違いは、まず排水管が破損していないか業者に確認してもらうまで、水を流してはいけません。壊れていて

危機管理教育研究所代表

国崎信江さん

排水したら、階下に汚水が漏れて大変なことになります。地震対策でよく「断水した時のトイレ用に風呂の残り湯をためておく」と言

トイレを用意しておきましょう。歯磨きシートや体を拭くウエットティッシュも必要です。レトルト食品を温める湯は繰り返し使っ

排水には特に注意

いますが、マンシヨンでは揺れて水が飛び散って流れる上、トイレに水を流せないで駄目です。

「排水できないという困りです。水を使わずに処理できる災害用

て。パスタやぞうめんのゆで汁は洗浄力があるので靴下や下着を洗うのに使い、残り汁はグラントーの植物などにやれば、排水せずに済みます。

「ほかに注意点は、階段で水を運ぶのは本当に大変。断水に備え、二十リットリ

マンシヨンは高層階ほど揺れが大きくなり、家具を固定していても壊れるものがあります。丈夫な麻袋を二、三枚用意しておき、散乱したガラス片などをすぐに片付けてください。ほろりとちりとり

タンクの飲用水を家族一人につき、用意しておきたい。部屋の中で十日間ほど過ごせるよう、食品や日用品も常備しておきます。

「エレベーターが使えない事態への備えは、非常階段で住民全員が下りるのにどれくらいかかり、非常照明は何分持つのかなど、問題点を見つける防災訓練が必要です。負傷者を運ぶ担架が回れない非常階段もあるのでは。屋内消火栓を使ってみるなど、実践的な訓練をしてください。

「日常」増える寂しさ

仮設住宅の玄関先で、飼いの犬のタローが寝そべっていた。十数歳の老犬は暑さにすっかりまいってしまったようだ。「あなたも大変ね」。幸さんが笑った。

塙さん一家が福島県郡山市内の仮設住宅に移り、3週間近くが過ぎた。肌にまとわりつくような盆地特有の蒸し暑い日が続いている。

部屋のあちこちにかわいらしい花のブーケが飾られている。避難所のボランティアから教わったのを幸さんが早速、作ってみたのだ。「少しでも部屋の雰囲気をもくしたくて」

窓が一つしかない仮設住宅は、昼間も薄暗い。備え付けの分厚くて無機質な水色のカーテンも、薄くて軽やかな水玉模様に買い替えた。

光一さんは相変わらず郵便局の仕事に追

原
発
事
故
か
ら
の
避
難
あ
つ
の
日
か

われる日々だ。旅館に避難していた時は毎日コンビニ弁当だったが、仮設に移ってから幸さんが手作りするようになった。

仮設住宅に移って、「日常」を実感できる機会は確実に増えている。けれども、それは古里を失った大きさをあらためて思い知らされる日々でもある。「このままずっとここに住み続けるのだろうか」。今はもう、慣れ親しんだ浜の風を感じることもすらかなわない。

玄関先のタローが不意に起き上がり、訴えるようにほえ始めた。「あら、もう散歩の時間」。日が傾き始めた街に、二つの影が伸びる。

臨（はなわ）さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん（43）と妻幸さん（43）、次女沙也加さん（15）は豊田市で暮らし、同県会津若松市に移った。長女梨奈さん（18）は東京で大学生活。